
自動販売機

さとう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

自動販売機

【Nコード】

N6306D

【作者名】

さとう

【あらすじ】

ある日、少年は変な自動販売機に出会ってしまいました。彼の運命は？

「ちよつとのど渴いたな。ジュース買うか」

健一は、自販機へ向かった。

そして、

「何にしようかな……よし！ オレンジジュースだ！」
と飲みたい物を決めるとお金を入れた。

「チャリン！」

すると、自販機は、

「いらつしゃいませ」

と軽くあいさつした。

さつそくボタンを押す。

「ポチッ！」

しかし、ジュースが出てこない。

「どうしたのかな？ 故障かな？」

健一は、自販機を軽く叩いた。

「コンコン！」

すると自販機は、

「いらつしゃいませ」

と言った。

健一は、

「壊れてるな……」

と思った。

そして、もう一度ボタンを押した。

「ポチッ！」

しかし、何も出てこない。

「いらつしゃいませ」

自販機は、また冷静に言った。
完全に故障だ。

健一は、

「あいさつは、もういいからお金返せ」

と言って、お釣りの返却レバーを動かした。

「グイッ！」

しかし、お金は出てこない。

「いらっしやいませ」

自販機は冷静だ。

健一は、どんどん腹が立ってきた。

「いらっしやいませ」

「お前うざいぞ」

「いらっしやいませ」

「それしか言えないのか？」

「いらっしやいませ」

「しつこいな」

「いらっしやいませ」

「単純な野郎だ」

「いらっしやいませ」

「それより金返せ！」

「それはやだ」

「えっ！」

健一は、一瞬止まった。

「…お前…今、『それはやだ』って言ったよな？」

すると自販機は、少し間をおいて、

「いらっしやいませ」

と言った。

健一は、

「今言ったよな？」

と自販機にきいた。

「いらっしゃいませ」

「今言っ たよな？」

「いらっしゃいませ」

「今言っ たよな？」

「いらっしゃいませ」

「今言っ たよな？」

「いらっしゃいませ」

「今言っ たよな？」

「いらっしゃいませ」

「だから金返せ」

「それはやだ」

「！」

健一は、思わず止まった。

この自販機やつぱり変だ。

「今言っ たよな？ 確かにはつきり『それはやだ』って言っ たよな？」

すると自販機は、少し間をおいて、

「いらっしゃいませ」

と言った。

健一は、

「よし、お前の考えはよくわかった」

と言って近くにあつた棒を拾った。

そして軽く、

「ガン！！」

と自販機を叩いて、

「おい！ 次は本気でいくからな！」

と言った。

すると自販機は、すぐに、

「ガタン！　ゴト！」

と商品を出してきた。そして、

「ありがとうございます」

と愛想よく言った。

健一は、

「やっとわかったようだな。最初から素直になりゃいいんだよ」
と言って缶を取り出した。

すると缶には、

「おしろこ」

と書いてあった。

健一は、一瞬で切れた！！

「てめー！　ぶっ壊すぞ！！　なんで、おしろこなんだ！　俺はジ
ュースが飲みたいんだよ！！」

自販機は、

「ありがとうございます」

と冷静に言った。

健一は、

「うるせー！！」

と大声を出した。

そして、おしろこの缶を見つめた…

健一は、ため息をつくと、

「不味そうだな…これ…」

と思った。

そして、仕方なくおしろこを一口だけ飲んでみた。
すると、

「……あれっ？……意外とおいしい………」
と言って目を丸くした。

思ったより、おいしかったようである。

健一は、いつのまにか、おしるこを全部飲んでしまった。
すると自販機は、

「おすすめです」

と言った。

健一は、

「お前、なかなかセンスあるな。いいな、おしるこ」
と言って自販機を見直した。

自販機は、

「ありがとうございます」

と言った。

健一は、

「もう1つ欲しいな」

と言ってお金を入れた。

そして、おしるこのボタンを押した。

「……………出てこない……………」

健一は、

「自販機さん。おしるこが欲しい」

と言ってボタンを押した。

「……………出てこない……………」

健一は、またまたブチッと切れた！！

「この野郎！！ 下手に出ればいい気になりやがって！！ 壊して
やる！！」

すると、自販機は、

「ガタン！ ゴト！」

と素直に商品を出して、

「ありがとうございます」
と言った。

この自販機、完全になめてる。

健一は、

「まあいいか…わかりやいいんだよ、わかりや…」

と言って、缶を取り出した。

すると缶には、

「やきとり」

と書いてあった。

健一は、一瞬で切れた!!

「いい加減にしろ!! この野郎!! しかもこれ、固形物じゃねーか!!」

健一は、叫んだ!

すると急にお腹が、

「グー!!」

と鳴った。

健一は、

「……そういえばちよつとお腹減ったな……」

と思った。

そして、

「ちよつと食べてみるか……」

と言って缶を開けて食べてみた。

「……………おいしい…………」

健一は、複雑な気分になった。

すると自販機は、

「毒入りです」

と言った。

健一は、その瞬間、

「ブー!!」

と吐いた。

自販機は、

「完全に毒入りです」

と言った。

健一は、

「なっ何だって! 毒入り!! お前ふざけてんのか!!」

と激怒した。そして、今食べたやきとりを必死に吐こうとした。
すると、自販機は、

「うそです」

と言った。健一は、

「ハア！ ハア！ ハア！ 驚かせやがって！！ 完全に頭にきた
！！ 貴様ぶつ壊す！！」

と言った。

すると自販機は素早く、

「私を壊すと解毒剤を飲むことができませんよ」

と言った。健一は、

「えっ！ 解毒剤……？」

と一瞬動きが止まった。そして、

「解毒剤ということは……」

と訊くと自販機は、

「そうです。毒入りです」

と言った。

健一は、

「オエー！！ この野郎なめてんのか！ 早く解毒剤を出せ！！」
と激怒した。

すると自販機は、

「それでは、私の出題するクイズに答えられたら解毒剤を差し上げ
ます」

と言った。

健一は、

「ほっ！ 本当だな！」

と自販機をにらんだ。

自販機は、

「では問題です。今ここに普通のやきとりなのに毒入りのやきとり
を食べたと思い込んでいる人がいます。それは誰でしょう？」
と言った。

健一は、

「……………もしかして俺？」
と、ゆっくり言った。

すると自販機は、

「そうです！！ 正解————！！ あなたで————す！！」
と叫んだ。

健一は、

「わーい！ やった————！！ バンザイ！！……………って喜ぶわけないだろ！！ 完全に切れた！ ぶっ壊す！！」
と言って棒をつかんだ！

すると自販機は、

「怒らないで、怒らないで！ 上に書いてある字を読んで下さい」
と言って、健一を落ち着かせた。

健一は、自販機の上に目をやった…
すると、こう書いてあった。

「自動おちよくり機」

（おしまい）

(後書き)

たまに来てね！

http://www.muroi1.com/sakmoh
tml

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6306d/>

自動販売機

2010年10月15日23時53分発行